

【書 評】

岩田一彦・米田豊編著
『「言語力」をつける社会科授業モデル 小学校編』

(明治図書、2008年)

馬 野 範 雄
(大阪教育大学)

2003年に行われた経済協力開発機構（OECD）による国際学習到達度調査（PISA）の結果、「読解力（言語力）」の低下が指摘されて以降、言語力の育成が求められている。今年改訂された学習指導要領においても、すべての教科・領域等の指導を通して、言語力の育成を求めている。しかし、多くの指導法の著書は国語科中心で、社会科として言語力をどうとらえ、どのように指導していけばよいのか、その問いに答えるものは少なかった。

ここに、その問いに応える書籍が発刊された。本書の構成は、次の通りである。

I 「言語力」をつける社会科授業とは

II 社会科授業における「体験・経験」と言語力の育成

III 「言語力」をつける社会科授業プラン

IV 「言語力」をつける社会科授業と評価

第I章では、PISA 型読解力・中央教育審議会に見る読解力・社会科における読解力を吟味し、次のような示唆に富む記述が見られる。

- (1) 今後の学校教育において、知識や技能の習得（いわゆる習得型の教育）と考える力の育成（いわゆる探究型の教育）を総合的に進めていくためには、知識・技能を実際に活用して考える力を育成すること（いわゆる活用型の教育）が求められる。〔p 9〕
- (2) 論理的思考は、例えば、「意見と事実の区別」や「判断と根拠」「原因と結果」「比較・対照」という観点から考えることができる。

社会科の学習において、同一の事象や出来事について、様々な立場の人が書いた文章を読んで比較することで、社会の仕組みの長所短所を理解したり、比較したり、よりよくするための議論をしたりするなどの活動をする

ことが望ましい。〔p 9〕

- (3) 社会科、地理歴史科、公民科では、身近な地域の観察・調査などを行う学習において、的確に記述し解釈を加えて報告すること、法則性や概念を基に事象を説明すること、価値判断や未来予測、また、未来がどうあるべきかという議論が必要な場面を設けて各自の解釈・判断を論述したり意見を交換したりすることが考えられる。〔p10〕
- (4) （社会科授業では、）記述、説明、解釈・判断のいずれの学習活動も社会認識形成と市民的資質形成を目的として展開されている。〔p16〕

第II章では、メディア・リテラシーの理論である経験（情報）のプールから新しいコードへの増殖過程と記述的知識から概念的知識への知識の構造とを関連づけ、「社会科授業における『体験・経験』と『言語力』の育成のモデル化を試みている。

第III章では、これまでの「言語力」育成モデルをベースに、次の五つの授業モデルを提案している。

- (1) 「記述・報告する力」をつける授業モデル
- (2) 「解釈する力」をつける授業モデル
- (3) 「説明する力」をつける授業モデル
- (4) 「判断する力」をつける授業モデル
- (5) 「習得・活用・探究する力」をつける授業モデル

各授業モデルには、三つずつの授業プランが掲載されている。いずれも、実践に基づく詳細な学習過程や子どもたちの反応なども示され、今後実践をしていく上で、大いに参考にできる実践資料といえる。